

1 長岡の縄文文化 ～自然とともに歩む暮らしと集落～

長岡は新潟県有数の縄文遺跡の宝庫である。それは豪雪がもたらす豊かな水や森が多種多様な動植物を育んだからにはほかならない。およそ8千年前に大きな環境変化に見舞われ、日本海側で雪が多く降るようになった。厳しくも豊かな自然の恵みをうけて、縄文人は独特の感性を育みながら、数千年という長い時間軸の中で暮らしてきた。豪雪の長岡はこの頃にはじまり、そこで培われた暮らしの知恵は、後世にも引き継がれていった。



馬高・三十稲場遺跡



馬高遺跡出土品

2 遺跡が語る古代の長岡 ～交通の要衝・古志郡の成立と人々の営み～

奈良・平安時代、現在の長岡市域は古志郡と呼ばれ、その中心となる古志郡衙（役所）は八幡林官衙遺跡周辺にあった。八幡林官衙遺跡は北陸道と信濃川に通じる旧島崎川沿いに位置し、頸城（上越市）の越後国府や信濃川・阿賀野川河口周辺（新潟市）の沼垂城、さらには寺泊からの航路で佐渡国（佐渡市）とも結ばれていた。郡内の各地に集落が営まれ、その周辺で稲作を中心とした農耕や須恵器・漆器・曲物製作など様々な手工業が行われ、交通・産業の中心地として後の長岡市へと通じる風土が形成されていった。



八幡林官衙遺跡



八幡林官衙遺跡出土品

3 雪国長岡の米づくり・酒づくり ～大地の水の恵み～

長岡は新潟県有数の米どころであり、米と水を主原料とする日本酒の製造が盛んである。それは、豊かな自然環境と歴史的背景によるものである。特に、日本有数の豪雪地帯であることから、清らかな雪解け水が豊富で、これが米づくりと酒づくりに欠かせない条件となっている。また、近世に商工業が発展し、交通網が整備されて、生産・流通を支える基盤となった。度重なる洪水など自然災害を乗り越え、米づくり・酒づくりは時代とともに発展し、地域の生活、風俗慣習、食文化などと深く結びついている。



旧長谷川家住宅



機那サフラン酒製造本舗 土蔵

4 長岡開府の歩みと復興 ～先人たちの営みと人材育成～

江戸時代のはじめ、藩主の牧野氏が長岡城を完成させて以来、長岡の町は政治・経済・文化交流の場として発展し、歴代藩主は教育にも力を入れた。幕末の動乱で戊辰戦争の戦場となり、町は壊滅的な損害を受け困窮を極めるが、小林虎三郎は人材育成こそが復興への足掛かりになると、救援米の売却資金を使って教材などを用意し、国漢学校を開校した。人材育成の大切さは「米百俵」の故事として現在も語り継がれ、多くの困難を乗り越える原動力となってきた。



長岡城跡



順動丸シャフト